

トラベルとトラブル

3)旅行者下痢症

キューと冷や汗が出るほどに腹が絞られる。便意も道連れだ。今しがた機内のトイレに行ったばかりなのに・・・、幸い通路側の席だが、三度目ともなると気がひける。席を立とうとすると、ベルト着用サインが点灯した。搭乗機は目的地に向かって下降を始めたのだ。バスなら青空トイレが利用できるのに・・・、着陸まであとしばらく、ここはもうガマンしかなかった。

搭乗前、空港のトイレにも駆け込んだが、出るのは水様の黄色い液体だけだった。未明に始まった激しい腹痛と下痢に、さらには寒気や嘔吐も加わり、ついには毛布を羽おり便器を抱えて座り込む始末だった。もちろん朝食は抜き、終日部屋で休んでいたかったが今日は移動日だ。ツアー仲間から離れてただ一人、ホテルに居残るわけにもいかない。フラフラと迎えのバスに乗り込み、一刻も早く目的地のホテルのベッドへと、機内ではただただそれだけを念ずる客だった。

ルクソールからアスワンまで約一時間、短いフライトがやけに長く感じられる。すでに着陸態勢に入ったためトイレには行けず、周期的な腹痛と便意を歯をくいしばってガマンする。痛みが引いてほっとしたのも束の間、次の疝痛に体はエビのように曲がり縮む。七転八倒できないのはシートに固定されているからで、握りしめた^{こぶし}拳は冷汗で冷たい。口はカラカラ、苦しい時の神頼みももちろん効はない。もうギリギリ、これ以上は耐えられないなと思ったとき、機はガクンと大きな衝撃を受けて着陸した。体が浮き上がるほどの振動を受けた瞬間、肛門に集中していた緊張感は一挙にはじけてしまった。

《失禁！！》

アーンと思わずため息。周囲の人に気付かれはしまいかと、羞恥心が頭をよぎる。冷たく気味悪い感触が下着にじわじわと広がった。着陸はしてもターミナルビルまで、体はシートベルトで固定されたままだ。到着ロビーのトイレまで、臀部の不快さも含めてさらにガマンが続く。機が静止してやっと立ち上がったとき、臀部にペタリと張り付いていたズボンが素早く下に引っ張った。シートにはシミが残されたが、そこは見ても見ぬふりで出口へと向かう。

「あれ、こんなところに武富士のティッシュが落ちていた。誰のかな？」

2～3人後から聞こえた日本語に、周囲の客から失笑が漏れた。武富士だなんて、日本から遠く離れたエジプトのこんなところで、誰だって予想外の言葉だろう。私も苦笑しかけたが、慌てて臀部のポケットに手をやるとそこは空っぽ。トイレの帰りに我がポケットから落ちたそれは、旅に出る直前、甲府駅頭で武富士の社員から手渡されたものだった。名乗り出るのも恥ずかしく、うつ向いた私は、悟られぬようなガニ股で出口へと向かった。

同行者とは空港で別れホテルに直行、駆け込んだ部屋でバスタブにつかり、暖まった身

体をベッドに休める。便器は独占で誰にも遠慮なくいつでも使える。『トイレでホッ!』(群ようこ) どころか「ホッ、ホッ、ホッ!!!」で、天国を実感する。粉末タイプのスポーツドリンクをミネラルウォーターで溶き、ジュースを加え、塩コンブを舐めながら少しずつ飲む。これから明日まで丸一日、部屋で静かにしていただければ気分は安らぎ、補水液は干天に慈雨を得たように喉を下って胃の腑に収まっていった。

アスワンの観光をキャンセルしたのは、それを残念と思わないほどに体力・気力が落ちてしまったからだが、しかし、より強い好奇心があれば折角ここまで来たのだからと、あるいは無理して出かけたかもしれない。ほどほどの好奇心しか持ち合わせていないと痛感したのは、舞台美術家・妹尾河童氏のインド旅行中の文章を思い出したからだ。

『河童の覗いたインド』によると、ヒンズウ教の聖地・バナラシを訪ねた彼は、インド人に交じってガンガー(ガンジス河)で沐浴したが、その日の夜中に猛烈な腹痛と下痢に襲われた。

「思わず声が出てしまうほどの痛みで七転八倒。トイレへかけ込むのがやっと間に合うような激しい下痢。ピーク時には10分に一回」(同書より。以下「」内も同様)

彼も私も症状は同様だが、そのあとが全く違った。

「朝になってやっと痛みは止まったが、下痢は続いていた。ティッシュペーパーをつつこんで栓をして出かける。(中略) なんと歩みにくいのは参ったが、体調に関係なく好奇心が衰えないのに、なお困った」

好奇心旺盛な彼は、肛門をティッシュで塞いでまで外出したのだった。

「おしめを取り換えながら1日中歩き回って、ホテルにたどり着いたのは夜更け。(中略) 3日間、下痢と付き合って、なんとか持ち直した」

なんと凄まじい好奇心と行動力に脱帽だが、このような腹痛や下痢は“裏急後重(しぶり腹)”で、大腸菌などの病原菌の経口感染で発症する。好奇心の強い彼は、恐らくヒンズウ教徒のするようにガンガーの水で口を注ぎ、その一部をつい飲み込んでしまったのだろう。では、私の感染源は一体何だったのか? エジプトに来てからの飲食内容を思い出していると、「あっ、そうか」と思い当たったのがあの氷だった。

一昨日の夜はカイロからルクソールへ、私はナイル寝台急行の乗客だった。夕食後にラウンジ車で飲んだオンザロック、犯人はそのときの氷かもしれない。その日、現実のピラミッドの前に立ったとき、今まで書物やテレビで数知れず見てきたものは一体何だったのか? 「百聞は一見にしかず」「思索は体験を超えない」「机上の空論」と、灼熱の太陽の下、その堂々の存在感に圧倒され絶句、これを遥かな昔に人間が作ったなんてと、めまいのような感動をおぼえたのだった。

半弦のイスラムの月の光に、キラキラと輝くナツメヤシの葉が車窓に流れ、集落があるのだろう、走り去る闇の中に時折ライトアップされたモスクが浮かんでは消える。日中のあの感動はまさに旅に出てこそ得られたもの、火照った体と心に口に含んだ氷が心地よく、列車の振動に身を任せながらカリカリとつい何個も噛み砕いてしまっていた。

清潔な国に住む日本人は抵抗力が落ちているため、東南アジア、インド、アフリカ、中南米などを旅すると、二人に一人は下痢するという。そのため海外では生水を飲まないのが常識となっている。飲み物自体がアルコールやボトリングされた清涼飲料水ならもちろん問題ないが、落とし穴が飲み物に入っている氷だ。それが水道水から作られたのなら生水を飲むのと同じことだし、実際、現地の氷がペットボトルやわざわざ煮沸した水から作られているとはまず考えられない。旅の高揚感とアルコールが、承知していたそんな常識をつい忘れさせてしまったのだ。

旅行者下痢症は病原菌感染が原因で起こることが多いが、汚染のない飲食物が原因のことも少なくない。例えばヨーロッパの水は硬水で、日本の軟水に比べてカルシウムやマグネシウムの含量が数倍から十倍もある。水中で硫酸イオンと対になった硫酸マグネシウムは下痢を来しやすく、医療の現場では塩類下剤として使われる。漢方ではそれは芒硝といわれ、古くは正倉院薬物の中に見られるという。

また欧米や中国の食品中の油脂量は和食に比べて多く、旅先ではそんな食品を三度三度続けて食べることになる。当然だが日常の数倍もの油脂量は消化器への負担となり、また下剤としても作用する。実際、油のヒマシ油は下剤として使われるが、ムッソリーニ率いたイタリアのファシスト党は自白強要のためヒマシ油を用い、下痢で死亡した人もいたという。下痢ではないが脂肪食で軟便になることも多く、作家の故・開高健は海外に出るときまって、荒縄のようだった大便がネチネチベタベタになると記していた。

一般に中華料理は油脂の使用量が多くおいしいが、口が卑しい私は中国ではつい食べ過ぎて下痢をすることがしばしばだ。こと胃腸に関して中国は鬼門なのに、朝昼晩、ごちそうを前にすると箸が止まらない。その結果はお決まりの腹痛、嘔吐、下痢の発作と、分かっているのに何度苦しめられたことだろう。

杭州は中国禅宗十大古刹の一つ・^{りんじんにんじ}靈隠寺を訪ねたときのことだった。昼食の予定を急に变えて門前の「天外天」にしたのは、そこが精進料理で有名なレストランと聞いたからだ。中国では精進料理は^{スウツァイ}素菜・^{スウシイ}素食といわれるが、齋は宗教的行事に関連して身を慎むことを意味するから^{スウジョイ}素齋ともいわれる。つまり、メニューに素の字があれば、肉や魚などを使わずに作る植物性食品を主とした仏教起源の料理のことである。

どんな料理なのかという好奇心と、精進料理なら淡泊だろうとの勝手な思い込みで食卓についたが、次々と出される料理には驚きの連続だった。例えば北京ダックの丸焼きやエビの天ぷら・酢豚などは、見た目こそつくり、しかも味や歯ごたえまでも似せて作られていた。植物性材料だけで見た目に豪華、味も満足という「もどき料理」は、殺生をせずにおいしく食を楽しもうという、中国人の食への飽くことのない姿勢が作らせたものだが、見事というか流石というか、ここには欲望を否定するという本来の仏教思想はカケラもない。

いずれにしても好奇心のおもむくままに箸を動かすすぎた私は、午後、近くの庭園観光

中にお定まりの発作に襲われた。最初に生あくび、次に涎がダラダラと出始め、むかむかと同時に嘔吐が始まった。傍の木の根元を汚してしまったが、腹痛はともかく下痢のガンはつらかった。木陰にしゃがみ込むには通行人が多すぎるし、腹を抱えてやっとの思いで飛び込んだ公衆トイレは、壁に並行に一本のコンクリートの台座と溝があるだけの、仕切りのない「ニーハオトイレ」（ニーハオは「こんにちわ」の意）だった。悪臭の漂う室内は一個の裸電球で薄暗く、大小便兼用の溝にはところどころに糞塊の山。一瞬足がすくんだが、切迫した生理現象には勝てない。排泄物に触れないよう急いでズボンの裾をたくし上げてしゃがみ込む。ほっと一息ついて周囲を見回すと、片隅から先客の目が注がれているのに気がついた。

温暖帯とはいえ冬の中国・江南地方の風は冷たく、日差しの入らぬ屋内よりはと、人々は道端で編み物などをしながら陽を浴びていた。解放経済前だった当時、レストランに暖房はなく、食事はコート着用のままだった。冷え切った体に、脂肪過多の食事は負担だったのだろう、早々に戻ったホテルの熱いバスタブに勝る薬はなかった。

しかし下痢の落ち着き始めた翌日、杭州から上海への列車内は窓からの隙間風が冷たく、マフラーで顔を覆い、コートは襟を立て、腰から下は新聞紙で被って寒さを耐え忍ばなければならなかった。たちまちぶり返した下痢に、何回も通ったトイレは便器口がぼっかり開いて、そこから冷たい風が吹き上げてきた。露出した肌に風が当たって、臀部はおろか肛門の芯まで冷え切り、トイレ通いがさらにまた下痢を呼んだ。矢のように流れ去るレールをうらめしく見下ろしながら、何回ズボンを下げては上げ、上げては下げたことか。

中央アジアはシルクロードの古都・ブハラの街でも、寒冷刺激（冷え）による下痢で苦しめられたことがあった。五月初旬ともなれば砂漠地帯は暑かろうと勝手に思い込み、特に防寒対策は講じなかったが、その日、サマルカンドは吹雪舞う街だった。ホテルの暖房は不調、持参の衣類のありっただけを着込み、さらに窓のカーテンを外して毛布の上に重ねたが、暖は取れないまま朝を迎えた。夜半に始まった下痢はブハラに移動してからも続き、旧市街ではトイレが気になって見学はそぞろだった。

そんな街中で出会った絵葉書き売りの青年は、私の腕時計を見るや「売れ、売れ」とさかんに言い寄ってきた。もちろん使用中のそれを譲るわけにはいかない。当時、海外ではデジタル時計はまだ珍しく、そのカシオ製は垂涎の的だったのだろう。しつこく食い下がる彼を振り切って、たまたま近くにあったトイレに飛び込んだのは急に便意を催したからだが、青年の追及を断るチャンスでもあった。入ったそこは、低い仕切りはあってもドアの無いトイレだった。

イスラム圏のトイレは和式トイレと同じしゃがみ式で、便器の奥に穴があり、そこに肛門の位置を合わせるから前向き座りとなる。一般に水勢が弱いため、便器に糞便が残らないようちゃんと穴に命中させるのがコツだ。しゃがみ込んでほっと一息、やれやれ助かったと思うと人の気配、見上げると目前にあの青年がいるではないか。動けなくなった獲物

を前に、彼は再び「売れ売れ」の執拗な催促。折しもの腹痛発作に、私は思わず腕の中に顔を埋めたが、ついでにとそのままの姿勢で彼を無視し続けた。反応しない（できない）私についてあきらめた彼は、何やらぶつぶつ言いながらやっと姿を消したのだった。